

ホワイトヘッドの『シンボリズム』(下の二)

細井雄介

On Whitehead's "Symbolism"

"Symbolism", a little book of A. N. Whitehead's lectures in three chapters, was published in 1927. In this book he considers the general problems of symbolism and maintains that all types of symbolism can be reduced to the symbolic reference between the two modes of perception. The first chapter deals with the characteristics of *presentational immediacy*, one mode of perception. The second chapter with the other mode, *causal efficacy*, and the structure of the *symbolic reference* between the two modes. In volume thirty-eight and forty-two of this publication, I translated the chapters into Japanese and gave my own interpretations of the many problematical points.

In this paper, I have continued the same work on the last chapter. The next time I intend to express my final understanding of his thought.

本「論叢」第38集、第42集を承けてホワイトヘッドの一講演の翻訳および注解をここで完了し、本講演に対する私の理解は次集で述べることにする。

翻訳の底本は Alfred North Whitehead: Symbolism—its meaning and effect, Cambridge Univ. Press, First Edition 1927, Reprinted by offset, 1938 である。本文八十八頁の小冊子に収められた本講演は全三章から構成されている。第一章および第二章の翻訳・注解はそれぞれ前記第38集、第42集において果した。今回は第三章を扱う。本章は前二章のごとく分節されてはいないが、前例にならい訳文全体は「」によってかこむ。若干の箇所では文意を鮮明にするために「」によって訳者の解釈を補った。

ホワイトヘッドによれば、経験はそれぞれ独立している三様態をもつ(第一章第九節参照)。一つは知覚の presentational immediacy という様態、二つで知覚の causal efficacy という様態、最後に概念的分析 conceptual analysis (いわゆる思考)の様態である。シンボリズムを論じてホワイトヘッドは、深淺の度合を問わず一切のシンボリズムは知覚の二様態の関連づけにその根拠を得ていると洞察した。本講演第一章の後半は知覚二様態の一つ presentational immediacy の特質を説明することによって当てられていた。それを承けて第二章の前半では causal efficacy の特質が、二つで後半では知覚二様態の関連づけが論じられ、symbolism の原理が確立されたのであった。

シンボリズムは知覚の二様態を合せもつ高度組成体の心性ではあるが、決して人間にのみ限られる特質ではない、とホワイトヘッドは考えている。だがその原理を確認したかれは、最後の第三章においては、人間社会におけるシンボリズム使用の諸相に考察を集中する。第二章を結ぶ末尾の一句は第三章の目的を明示するものであった——「このシンボリズムの習慣が種々の人間社会の結合・進歩・解体を促進するに際して果たしてきた役割——これを分析して私の教説を例解することが次章の目的である。」

『シンボリズム——その意味と作用』

第三章

「シンボリズム使用の諸相

シンボリズムに対する人類の態度は誘引・反撥の定かならぬ交錯を示している。実際のな知恵とか、究極の事実まで透徹しようとする理論的欲求とか、反語的な批判衝動などが主としてシンボリズムへの反撥を動機づけてきた。実際のな人々が必要とするのは事実であってシンボルではない。明晰な理論的知性の持主は、いかなる犠牲や危険をもかえりみず厳密な真理をもとめる高邁な熱意にもえて、シンボルはまやかしにすぎず、これは理性がおのれのものとする単純な真理の内奥の聖域を蔽い歪めるとみて、シンボルを排斥する。人類のさまざまな愚行を皮肉に批判する人々は、野蛮な昔の低劣な思いつきを象徴する無益な儀式のがらくたを片づけて、目ざましい功績をあげた。シンボリズムへの反撥は文明人の文化史にいちじるしい一つの要素として目立っている。このような絶えまない批判が、組織された社会の実効の面でも強健な思想指導の面でも、健全な文明の振興に必要な貢献をつくしてきたことに疑念をはさむいわれはなからう。

シンボリズム使用の諸相を説明しても、このように、生活内の象徴的な諸要素は熱帯密林の植物のごとく伸び放題の傾向をもつと認めておかなければ、完全でない。さまざまな附属的シンボルによって人類の生活はたやすく圧倒さ

れてしまふ。たえず余計なものを刈込みながら、新しい表現形式を求めてやまぬ未来に適應してゆく過程がすべての社会に必要な過程である。古いシンボルを社会構造の変化にうまく適合させてゆくことこそ社会学的にみた政治的手腕における英知の決定的な目印である。そして時にはシンボルイズムの革命も必要とされるのである。

しかしながら、ここに一つのラテン語格言がある。これについてはわれわれが若年のころ幾人かの方々は作文を書かせられたことであろう。英語ではつぎのように言える——*Nature, expelled with a pitchfork, ever returns.*〔熊手で無理矢理に追いだしても自然は必ず戻つてくる。 *naturam expellas furca, tamen usque recurret.*〕この格言はシンボルイズムの歴史によって例証される。どのようにシンボルイズム追放につとめても、これは必ずもとに戻つてくるのだ。シンボルイズムは決して無益な思いつきとか墮落退化の現象にすぎないものでなく、人間生活の素地そのものに内在しているのである。言語それ自体がひとつのシンボルイズムである。また別の例を挙げれば、あなた方の政府の諸機能をこの上なく簡素なものに切詰めたところで、シンボルイズムはやはり残つてゆく。それは今までより健全なもの、一層雄しく儀礼的なものとなつて、より精妙な觀念を示すかもしれない。それでもシンボルイズムに変わりはない。あなた方が個人の臣従をほめかす宮廷作法は捨てたにしても、公式のレセプションがあれば、州知事とは儀礼の握手をする。階級はそれぞれ従属関係で結ばれて最後は大君主にいたると説く封建制の教説がおのれのシンボルイズムを必要とするように、人間の平等を説く教説もまさしく同じようにおのれのシンボルイズムを獲得する。人類はおのれを表現するためにシンボルを見出さねばならないと思われる。まさに「表現」こそは「シンボルイズム」なのである。

州政府の公的儀式がさむぎむと簡素化されてくるや、私的なクラブや団体ではあれこれの象徴行動を再建しはじめている。あたかも人類はいつでも変装に努めていなければならぬかと思われるほどである。このような絶対的衝動を思うと、他愛ない変装などとみなすのは人生における諸々の象徴的要素を誤つて捉える考え方であらう。これら諸要

素の機能は明確で統御しやすく再生可能でなければならず、またそれぞれ固有の情動的効能をも充分に具えていなければならぬ。symbolic transference (第二章第一節および第六節参照) はそれら諸要素の相関的意味 (their correlative meanings) に当該シンボルの右記のごとき属性のいくつかを、あるいはすべてを賦与するものであり、そうすることによって、意味を——知識・情動・意図における要素として——意味自体についてみれば果してそれに値するか否かを問わず、とにかく、明確で強度の効能性の域にまで高めてゆく。シンボリズムの目標は象徴される物事の重要性を高めることである。

シンボリズムの事例を論ずるばあい、最初の困難は象徴されているのは何であるかを正確に見つけることである。シンボルはまぎれもなく明澄であるのに、その背後に横たわるものを分析することはしばしば極度にむずかしく、単なる儀礼的行為をこえて強く訴える何かがあるとはつきりしているところでさえ、そうなのである。

幾時代もつづいてきた儀礼のどれをとっても、われわれのみるかぎり、これをシンボルとみなしての解釈は当の儀礼そのものの変化よりもはるかに急速に変遷していると思われる。しかもこのような解釈の流れにおいて、同じ一つのシンボルが異なる人々にとっては異なる意味をもつであろう。いかなる時代でも人々の心性は、ある者は過去に重きを置き、ある者は現在に、ある者は未来に、さらには決して夜明けをもたぬ疑わしい未来に重きを置く。これらさまざまな人々の群にとって、同じ一つのシンボリズムも種々に異なる色合の曖昧な意味をもつことになる。

人類のいかなる社会であれ、その社会生活におけるシンボリズムの必須の機能を察知するためには、作用する結合力と破壊力について何らかの評価をもたなければならぬ。人間社会には多くの種類があり、細部を問題にすれば、それぞれ独自特別の研究を必要としている。ここでわれわれは一定の国土を領有している国民に注意を固定してみよう。こうするとただちに地理的統一が前提される。地理的統一をもつ共同体こそわれわれが世界に見出す共同体の第

一型を構成している。たしかに存在の尺度で次元の低い方へ行けば行くほど、社会を構成する個体間の緊密な相互作用によって、地理的統一はいよいよ必要である。高等動物の社会、昆虫社会、分子の社会など、すべては地理的統一をもっている。岩とは分子の社会にはかならず、ありとあらゆる種類の活動を分子それぞれに許している。私がこのような低次の社会形式に注意を向けるのは、社会生活とは高度組成体の特徴であるという見解を払拭するためである。実際はその逆である。生残するという価値に関するかぎり、ほぼ八億年の歴史をもった一片の岩はどのような国民の達成する短い寿命をもはるかに越えている。生命の出現とは組成体のがわが自由を求めたことと理解すればよいのであって、もはや環境の束縛という点から捉えるだけでは解釈しえない個体の独立、自己の利害追求や活動を伴った個体がある種の独立を求めたことである。感受性を具えた個体がこのように出現したことの直接的結果は、社会というものの寿命を八億年から数百年、いや数十年にまでも引下げたことであつた。

生物出現ということは、個体にせよその社会にせよ、いずれかがすぐれた存続価値をもっていたためということにはならない。個体の特異性を右のように極端に求めるようになると諸々の破壊的要素が導入されるが、国民生活はこれらに直面せざるをえない。社会保存の利点、逆に自由から生ずる不均質という刺戟、われわれは兩者いずれをも必要としている。社会はこれに属する個体がそれぞれ相異なるさなかで、円滑に運ばれなければならない。環境のもつ社会的性格は個人を束縛するが、このような因果的束縛にすぎないものからの離叛がある。最初この離叛は盲目的情緒衝動という形式をとる。ついで文明社会では理性がこのような衝動を批判して偏向を生じさせる。いずれにせよ、行動には個体のもつ源泉があつて、これは社会的順応という義務を免れている。このような確実にして本能的な反応が衰えてきたことに代るうとして、社会生活の種々の目的を象徴的に表現する種々複雑な形式が導入されてきたのである。そのようなシンボルに対する反応はほとんど機械的のといつてよいが、完全にそうであるわけではない。すなわ

ちシンボルの意味に対する reference (関連づけ) の作用。第一章第四、五、六節参照) には、情動面からの支持が加えられるか、批判が浴せられるか、いずれかであり、このような reference は絶対的といえるほど明瞭ではない。環境の影響力を至上のものとしてこれに本能的に順応する態度は、これまでに変容をうけてきている。代って何かが現れたが、この何かは皮相な性質のものであるため批判を招きはそのもの、習慣として用いられることから一般には批判を免れている。ここに生ずるようなシンボリズムがこれに関連する思想を—この思想を表現することによって—可能ならしめ、同時に他面では機械的に行動を指示する。個性性を抑圧する本能の力に代って、社会は公益および個人的立場をともに守ってくれるシンボルの効能を獲得したのである。

右の目的に仕える各種のシンボリズムのなかで、まず言語を挙げなくてはならない。私の意味する言語とは、抽象概念とか現実の個物とかを表示するだけという機能にとどまらず、問題の国民に対して十全の影響力をまもっている言語である。単に意味を表示することに加えて、語や句には包括的な暗示力および情動的な作用力が伴っている。言語のこのような機能が依存するのは言語が用いられてきた仕方であり、個々の句がどれほど親しまれているかであり、またそのような句が連想させ、そのため派生的に当該の句そのものにまで転移反映をみせる情動の歴史である。二国民が同じ言葉を話すとしても、情動面にはたらく語句の作用力は両国民にとって大抵のところ異なるであろう。一国民に周知のことが相手の国民にとっては異様であらうし、一方にとっては親密な連想で満される事柄が、他方からみれば比較的疎疎であることになる。たとえば、それら二つの国民が互いに遠くへだてられていて、動物相・植物相も異なるとすれば、一方の国民の自然詩はあくまで直接に訴える力を相手の国民に対してはもたぬことになるう。

ウォルト・ホイットマンの詩句——

The wide unconscious scenery of my land

わが國の広々と無心の情景

シェイクスピアの詩句——

... this little world,

この小さな世界、

This precious stone set in the silver sea,

しろがねの海に置かれたこの貴き宝石

これらを並べて、前者がアメリカ人にとって、後者がイギリス人にとって、どのように響くかを較べてみるがいい。勿論アメリカ人であろうとイギリス人であろうと、ほんの少しでも歴史感覚や同胞感、あるいは共感的想像力を具えた人であればだしも、両方の詩句が伝える多くの感情を見抜くことができよう。けれども、生れて間もない幼児期の記憶からはじまる、まさに直接の直覚は、一方の国民にとっては大陸の広さという直覚であり、他方の国民にとっては小さな島国世界という直覚である。ところで自分の国土の地理的様相そのものを愛すること、すなわち、その丘や山々、広野や樹木、花、鳥、ありとあらゆる自然の生色に対する愛は、一国民を形成する結合力のなかで小さな要素である。かぎりなく貴い宝を共有しているという感情をあまねく育てること、これこそが、文学を通じて、また人生の初期に知る慣用の句々を通じて作用する言語の機能である。

このような例を挙げてみたが、これが何か独得の重要性をもつと私は考えているのだ、と誤解してはならない。これは百もの仕方で例解しうる事柄のわずか一例にすぎない。また言語にしても、同じ右の目的をはたすに有効な唯一のシンボリズムではない。ただ格別な仕方で、言語は、これが誘いだす共通の情動によって国民をひとつに結合させながら、しかもなお、思想の自由、各個人の批判の自由が表現を見出すさいの道具である。

社会組織の結束維持は本能的行動という、そしてまた諸々の習慣・先入見をとりまいて群生する本能的情動という盲目の力によっている、と私は主張する。それゆえ、文化を尺度としてみた進歩はいかなるものでも必ず社会保持に向う、というのは正しくない。全体としては逆の場合が多いのであって、自然研究はいずれもこのような結論を確証

している。生命に新しい要素が入ると、古い本能の活動は多くの点で不適切なものとなる。だが表現を許されない本能は分析されることもなく、盲目的に感じられるままである。そこへ破壊的な諸力が一層高次の生存水準を保つために導入されると、それら諸力は暗闇のなかで目に見えない敵と闘うことになる。このばあい、テイラー [Henry Osborn Taylor, 1856—1941. 古代・中世の思想史に關するアメリカの研究者] のみごとな句を用いれば、"rational consideration" (合理的配慮) の介入する余地がないのである。ところで本能的諸力の象徴的表現というものはこれら諸力を明るみへと引きだしてくれる。すなわち、諸力の差異を明かにして、それぞれの輪郭を描いてくれる。そうなると理性のはたらく機会が生じ、かなりの速さで、さもなければ荒廃・再建を遅々として幾世紀にもくり返したにちがいない事柄によい結果をもたらす。人類はそのような機会をしばしば捉えそこねてきたし、この失敗こそは皮肉な批判にもっともな標的である。けれども、理性があまりにしばしば誤りを犯してきたからといって、この事実が理性は決して成功しないというようなヒステリーの結論に正しい根拠を与えるわけでもない。理性は重力に見立てることができよう。重力は自然の諸力一切のなかでもっとも弱いものである。だが結局のところ数々の太陽や恒星系の創造者、宇宙と呼ばれる諸々の壮大な社会の創造者なのである。象徴的表現は第一には本能に情動を追加することによって社会を保持し、第二にはみずから表現した特定本能の輪郭描写によって理性に足場を提供する。新奇なものは、すぐれた水準への向上を含んでいてさえも、破壊の傾向をもつ、というこの教説は、キリスト教がローマ帝国の安定性に及ぼした影響を実例として説明できる。また、世界に自由・平等を確保した三つの革命によっても説明できる。すなわち十七世紀イギリスの革命期、アメリカ独立戦争、フランス革命の三つである。イギリスは辛うじて社会組織の破壊を免れた。アメリカはそのような危険に落込まなかったが、フランスでは新奇なものの登場がもっとも烈しく、ひととき大崩壊を経験した。十八世紀ホイッグ党政治家バーク (Edmund Burke, 1729—1797) は、前の二つの革命は代弁者

として是認し、フランス革命は予言者として弾劾した哲学者であった。天才であり政治家であり、前の二革命は直接に見聞し、第三の革命については深く思索した人であるが、社会を結合したり破壊したりする諸力についてこのよう
 な人の語る言葉は傾聴に値する。不幸にして政治家はその時々的情熱に支配されるものであり、パークもこの欠陥を
 どこまでも共有していて、フランス革命の呼びさました反動的情熱におのれを失うほどであった。それゆえ、社会的
 諸力を把握した全般的見解にみられる英知は、それら諸力から引きだした結論があまりにも均衡を失っているため
 に、隠されてしまっている。かれの偉大さはアメリカ独立戦争に対する態度にもっともよく窺える。一層全般的な考
 察が含まれているのは、まず若年の著作“*A Vindication of Natural Society*”〔一七五六年〕、ついで“*Reflections*
on the French Revolution”〔一七九〇年〕である。前者は皮肉の意味をこめたものであるが、天才によく見られるよ
 うに、自覚なきまま予言を行っている。この論文の実質は、文明諸芸の進歩は社会組織の破壊となりやすい、という
 主題をめぐっている。パークはこの結論を *reductio ad absurdum* (論ノ行キスギ) とみている。けれども実は真理で
 ある。後者―その直接の影響という点では、おそらく今までに書かれたものとも有害な著作であろうが―これは「先
 入見」(prejudice)を一つの社会結合力とみて、その重要性に注意を向けている。ここでもまた私は、かれの前提は
 正しいが結論は誤りであった、と考える。

パークは組織された社会が存在して、ついには国家の円滑な統一の行動に落着いている、という恒常的な奇蹟を検
 討する。そのような社会は何百万もの個人から成るであろうが、各個人はそれぞれ個々の性格、個々の目的、個々の
 私欲をもっている。これら個々別々の単位の群を導いて一つの組織された国家―そのなかで各個人が政治的、経済
 的、美的などとそれぞれ果すべき役割をもつ国家―の維持へと協働させる力は何か。これがパークの間である。かれ
 が対照させるのは、文明社会の複雑な諸機能と、単なる集団・群集とみなしたばあいの千差万別の市民各人とであ

る。この謎に対して、問題の磁力は「先入見」である、言いかえれば「世のならわし」(use and wont)である、とかれは答えた。ここでバークは「群集心理」を扱う現代の全理論に先鞭をつけると同時に、十七世紀に形成されロッキンには是認されていたホイッグ党の根本教義を見捨てた。群集にすぎないものがみずからを自発的に組織して社会をつくるさいの「始源的契約」(original contract)に国家の始源は由来する、というのがホイッグ党の因襲的教義であった。このような教義は根拠なき歴史的虚構に国家の始源をもとめるものである。バークは時代にはるか先んじて、前例というものの政治力としての重要性に着目した。だが不幸にも当時の興奮にとらわれて、その重要性を進歩的改革の否定という意味に解釈してしまったのである。

さて、社会がいかにして個々の成員を、社会の要求に順応しつつ機能するように仕向けるかを調べてみると、ここに作用している重要な因子が伝承の広大なシンボルイズム体系であることを見出す。言語および動作のシンボルイズムという、表現を得た複雑なシンボルイズムが存在し、共同体の隅々にまでこれが拡がっていて、さまざまな共通目的の基底を時に深く時に浅くの場合に応じつつ人々に理解させている。個人行動のとり方は、その時かれに示された鋭く明確な特定シンボルと直接に相関する。シンボルに対する行動がきわめて直接的な反応となつて、象徴されている究極の事物との関連づけが実際には削除されるような事態も生じよう。意味がこのようにして排除されることが反射行動と呼ばれている。時にはシンボルの意味に対する関連づけが何ほどか積極的に介入してくることもある。だがこのようにして意味が呼出されるにしても、最終目的を確保すべき特殊行動について何らかの合理的啓発を与えるような個別性および明確性が、この意味に具わっているわけではない。このような意味は曖昧だが執拗である。その執拗さが催眠効果を演じて、シンボルと結ばれた特殊行動を個人に遂行させる。この事態全体のなかで輪郭のはっきりして明確な要素は個々のシンボルであり、それらシンボルから結果として生ずる諸々の行動である。だがシンボルもそれ自

体では不毛な事実にとどまり、それが直接に連想させる力ぐらいではおのずからの一致を獲得するに不十分である。どれほどくり返しがみられても、あるいはそれぞれ相異なる機会にどれほど類似がみられても、それでもなお、機械的な服従だけを確保するにも十分でない。しかし、漠然と懷かれていたものの、われわれの精神的本性にとって根本をなすような諸々の觀念に対する忠誠を、シンボルは現に喚起しているのである。その結果、われわれの本性はふるい立ってすべての敵対的衝動をひととき停止させ、こうして当のシンボルは必要な反応を行動に移させる。このように社会的なシンボリズムは二重の意味をもっている。實用の面からみれば、個人を特定の行動へと方向づけることを意味する。理論の面からみれば、シンボルが雑多な群集を円滑にはこぶ共同体へと組織する力を得るとき、このことが生ずる理由、すなわち情動的な附属物を伴った漠たる究極の理由を意味している。

国家と軍隊を対照させてみると上述の原理が説明されよう。国家は軍隊よりもはるかに複雑な状況を扱う。この意味で国家は軍隊よりゆるい組織であり、住民の大方の人々にとっては、共通のシンボリズムも、ほとんど同じ状況が頻繁に起るからその効力がある、というようなものではない。だが規律ある軍隊は、一連の明確な状態におかれるや、ひとつの単位として行動するように訓練をうけている。人生の大部分はこのような軍隊の規律が及ぶ範囲の外にある。軍隊の教練は一種類の仕事のためになされており、その結果、機械的行為に頼ること多く、究極的理由にまで訴えることは少い。訓練された兵士は号令をうけると機械的に行動する。音声に反応し、觀念は切捨てる。これは反射行動なのである。だが一層深い側面に対して訴えることは軍隊においてもやはり重要であって、そのような訴えかけは別種のシンボリズム、軍旗とか連隊の武勲記念碑とか、その他象徴的に愛国心をそそるものによって行われている。このように軍隊には、ある限界状況下で機械的服従を生みだすべき一連のシンボルと、他方、義務遂行の重大さをひろく感じさせるべき別種シンボルの群とがある。後者は勝手気儘な反省思索を抑えて、前者一連のシンボルに対

する機械的反應が弱まることを防いでいる。

國家の大多數の市民には實際のところ、兵士にとっての号令のように、何かシンボルに対して確實に機械的に従うということはない。わずかな例外は交通巡査の合図に対する反應ぐらいなものである。それゆえ、行動をどこか周知の方向へ進ませるように指示するとともに、これよりはさらに深く國家目的との関連に注目させるようなシンボル——このようなシンボルがひろくゆき渡っていることに國家はきわめて独得な仕方では依存している。社會がおのれを組織化するときに依存するものは、一般に普及している觀念を呼びおこすと同時に一般に理解されている行動を指示するような、一般に普及しているシンボルである。言語表現の通常の諸形態はこのようなシンボリズムのもっとも重要な例である。またその國の歴史がもつ英雄的な局面もその國の端端的な価値のシンボルとなる。

革命が起つて、通常の諸目的追求の通常行動へと導くこのような通常のシンボリズムが全面的に破壊されたとき、社會がおのれの解体を救いだせる道は恐怖の支配という手段によるばかりである。恐怖の支配を免れた革命というものは社會の实效ある根本的シンボリズムを無傷のままに残したのである。たとえばイギリス十七世紀の諸革命や十八世紀アメリカ独立戦争は、それぞれの共同体の日常生活をほとんど変えることなく残した。ワシントンがジョージ三世にとつて代り、合衆國議會がイギリス議會に代ったときにも、アメリカ人は社會生活の一般構造に関するかぎり、依然として自分たちのよく知る旧來の方式をつづけていた。ヴァージニアにおける生活は独立以前とさして変りない様相を示していたにちがひなからう。パークの用語によれば、ヴァージニア社會の依存していた諸々の先入見は壊れなかった。普段の記号群はやはり人々を普段の行動へと向わせ、普段の常識を正当づけるものとして働いていたのである。

私の意味することを説明しようとして難しい一点は、深い实效をもつシンボリズムが、社會に没透し共通の目的感

を呼びおこす多様な種類の表現から成立っている、という事実である。個々の細部はそれほど重要でない。象徴的表現の蔽う範囲が全体にわたることこそ必要なのだ。ワシントンとかジェファースンのごとき国民的英雄は、アメリカ人の生活を活気づける共通目的の象徴である。偉人のこのような象徴的機能は公平な歴史的判断を得ることが難しいもののひとつである。一方にヒステリー気味の見下しがあるかと思えば、反対にむやみと持上げて非人間化へはしるヒステリーもある。人間であることを見失わずにその偉大さを示そうとするのはきわめて難しいことである。けれども、少くともわれわれが人間であることをわれわれは知っている。それゆえ、英雄たちの与えてくれる鼓舞激励も、かれらも人間であったことを忘れてしまうと、半ばは失われてゆく。

アメリカの偉大な人々にふれたが、これは私がアメリカで話しているからであって、すべての国あらゆる時代の偉人にとっても同じ真理がまさしく当てはまる。

さて、今回の講演で展開してきたシンボリズムの理論によれば、純粹な本能行動、反射行動、シンボルに条件づけられた行動という三者の区別が可能であろう。純粹な本能行動とは一箇の組成体(第一章第二節参照)が發展するにあたって、その外部環境の既定事実によって課せられる条件、すなわちその組成体の知覚様態 *presentational immediacy* には何の関りもなしに記述可能な条件をみるだけで完全に分析することのできる、組成体の機能である。このような純粹本能は *causal efficacy* そのものに対する組成体の反応である。

この定義にしたがえば、純粹本能とは環境の刺激に対して組成体が生みだす反応のなかでもっとも原始的な型のものである。それゆえ無機物がその環境に対して示す物理的反応のすべては本能と名づけてよからう。有機物のばあい無機物と第一義的に異なる点は、その微細な諸部分が内的な相互適應をはるかに微妙に行うことであり、時には情動の昂揚を伴うことである。こうして本能、すなわち直接の環境に対する直接的適應は、生物組成体の諸目的にむけて

行動を指示するという機能において一層顕著になる。世界は数多い組成体から成る一つの共同体であり、それら組成体は一团となって各員に対する環境面の影響を決定している。本能という姿をとった環境的影響が個体の存続に都合よければ、はじめて持続性のつよい組成体の持続的共同体が存立する。このように環境としての共同体は、これを構成する個々別々の個体の存続に責任を負い、他方、個々別々の個体は環境に対するそれぞれの寄与に責任を負っている。電子や分子はどこまでも存続してゆくが、それは諸々の組成体社会に関りをもって、自然の安定せる秩序のための右に述べてきた第一義的法則を満足させてゆくからである。

反射行動とは、シンボルに条件づけられた行動を楽しむ、あるいはすでに楽しんだ組成体が、やや複雑な型とはいえ、とにかく本能へと一歩後退したときのものである。それゆえ、これについての論議は後に回そう。シンボルに条件づけられた行動は、presentational immediacy という知覚様態すなわち同時的世界の sense-presentation (感覚の現前。第一章第二節参照) を享受する高度組成体に生ずる。この sense-presentation が象徴的に働いて鞏固な causal efficacy の知覚の分析をすすめてゆく。そのさい、空間における位置とはまず sense-presentation に属するものであるが、このような空間位置をとる構成因子に分解されるものとして causal efficacy は知覚される。人体の外に知覚された組成体について、その純粋な causal efficacy を知覚しようとしても、空間に関する人間の識別力はあまりにも微弱であり、そのために、ここに生ずる symbolic transference (前出。知覚の二様態——ここでは causal efficacy と空間上の位置との知覚——を関連づけるときに起る情動・意図・信念などの変移) を規制するものは実際には無く、わずかに実践上の結論——言いかえれば、生存の意義を支える価値、または論理的および美的な自己満足——という間接的規制がみられるばかりである。

presentational immediacy とは知覚様態から symbolic transference は causal efficacy とは知覚様態の分

析を生みだすが、シンボルに条件づけられた行動とはこの分析に条件づけられた行動のことである。このような分析は正しいことも誤ることもある。それは、実効を及ぼす諸物体が現にとっている分布状態に、その分析が適合するか否かにかかっている。分析が正常な事情のもとで十分に正確であるかぎり、組成体は環境独自の事情についての広汎な分析におのれの行動を順応させることができる。この型の行動が支配しているところでは、純粹な本能は地位を奪われている。この型の行動は思考が大いに助成するものであり、思考はシンボルを意味への指示者とみて利用する。純粹な本能に誤りが起る、などと考えるのは間違ひである。だがシンボルに条件づけられた行動には過誤が生じうる。causal efficacy の象徴的分析に誤りが生じうるからである。

反射行動とは組成体の、全面的に sense-presentation に依存する機能であり、symbolic reference (前出 reference 参照)を通じての、causal efficacy 分析を少しも伴っていない。知覚の意識的分析では二知覚様態の象徴的な關係を分析することが第一の問題となる。それゆえ反射行動は思考によって妨げられる。思考は不可避免的に symbolic reference を優越させてゆくからである。

反射行動が起るのは、シンボリズム操作によって組成体が直接の sense-perception (感覚知覚、第一章第二節参照)に反応して行動する習慣を覚えたとき、そして、象徴作用のなかで causal efficacy を強調することをやめたときである。それゆえ反射行動とは symbolic reference という高度な活動からの後退を示している。意識的な注意の欠けているとき、このような後退は実際に避けがたい。反射行動は不運な結果を招くことがあろうとも、これが誤りを犯すこともあるとは決して言えないものである。

このようにみれば、昆虫の共同体を束縛している重要な因子は、おそらく、上述の純粹な本能という觀念に属するものであろう。個々の昆虫はそれぞれ、直接の過去から受けついだ原因たる条件が適確におのれの社会行動を決定す

するような組成体であると思われるからである。だがここでは反射行動も副次的役割を演じている。ある種の行動領域では昆虫の *sense-perception* がその行動を機械的に決定してきているからである。さらに微弱にはなるが、原因たる状況を *sense-presentation* が象徴的にはっきりと示すようなときには、そのような後続の状況に、シンボルに条件づけられた行動が介入してくる。けれども、積極的な思考にしてはじめて、シンボルに条件づけられた行動がたちまち反射行動へと後退することを防げるのである。共同体生活が最高に成功した事例は、純粹な本能が至上の支配を行うところに存在する。そのような事例が生ずるのは無機物の世界だけである。たとえば岩石、惑星、太陽系、星雲などを形づくる活動的な分子の社会においてである。

一段発展の進んだ生物共同体という型に要求されるのは、*sense-perception* が幸いにも生じて、外的環境における *causal efficacy* をみごとに捉えることである。また共同体に適した反射行動へと後退できることも必要である。これが叶えられると、低次とはいえ心性を具えた一層柔軟な共同体を得たことになる。いや、遠隔の環境に生じた偶然の些事に対しても何らかの適応力をもつ生きた細胞さえも得たことになる。

最後に人類はさらに一層人為的なシンボリズムを用いる。これは主に *sense-perceptions* の選別に注意を向けることによって得られる。たとえば語である。語についてはシンボルからシンボルが派生してゆく連鎖が生じ、そのとき、究極的な意味の所在地と最終シンボルとを結び位置上の諸関係は、最後には完全に失われてしまう。それゆえこのような、いわば恣意的連想によって獲得された派生的シンボルは、実は右の連鎖における中間点を抑圧する反射行動の結果にはかならない。中間項のこのような抑圧があるときに、「連想」(*association*)の語は使えと言えよう。

人類の用いるそのような派生的シンボリズムは、一般に決して、単なる意味の指示にとどまるものでない。単に意味の指示と言えば、シンボル・意味の両者共有の特徴がすべて失われたものであろう。実効をもつシンボリズム

ムにおいては、ある種の美的特徴がいつでも共有されている。そして意味はシンボルが直接に喚起する情動や感情を獲得する。このことこそ文芸を支える全面的基盤である。すなわち、ここでは語が直接に喚起する情動や感情が、その意味を思ふことによって生ずる情動や感情を適切に強めてゆくはずになっている。さらに言語においてはシンボリズムに一種の曖昧さが伴う。一つの語は、それ自身の歴史とか、おのれがもつ他の種々の意味とか、同時代文学における一般的地位などを象徴的に連想させる。こうして一つの語は情動の側面における過去のおのれの歴史から情動面の意義を集めてきて、今度はその意義が現行の用法における意味へと象徴的に移されるのである。

同じ原理は人間の用いる一層人為的な種類の一切のシンボリズム、たとえば宗教芸術などに妥当する。音楽は、みずから強い情動を生みだすために、情動の象徴的な移行に適している。音楽自身の位置関係も大切である、などという気持は音楽の強い情動によって一瞬に消えてしまう。オーケストラの位置設定が重要なのは、ただひとつ、音楽を聴かせてくれるからである。音楽を聴くのはオーケストラがどこにいるかを正しく鑑賞するためではない。自動車の警笛のばあいには正反対の状況が生ずる。警笛に対する関心は、ただひとつ、未来を決定する causal efficacy の在る特定の位置を決定することにある。

情動の symbolic transference をこのように考えると、もう一つの問題が浮ぶ。sense-perception については、一体この知覚に結びつく美的情動はその知覚から派生したものか、それとも、ただその知覚と同時に起っただけか、という疑問が出されよう。たとえば音波はその causal efficacy によって人体に快い美的情動の状態をつくりだすであらうが、この状態はついで音響の sense-perception へと象徴的に移ってゆく。耳の聴えぬ人々が音楽を楽しまない事実をみれば、音楽のばあい情動はほとんど完全に音楽的音響の所産であると思われる。けれども人体は太陽光の紫外線によって、色の感覚を少しも生じない仕方、因果的な影響をうける。色は見えなくとも、その種の光線は明

確な情動的效果をつくりだしている。そして音響でさえも、可聴限界にやや上下するものは、可聴音の総体に何がしか情動の味わいをつけ加えていると思われる。芸術に因する美学はどのような理論であるにせよ、その根柢に、ここに述べてきた情動の象徴的な変移という問題全体をもっている。たとえば、無関係の些事はきびしく抑えることが大切である理由が説かれるが、それは情動というものが相互に抑制し合うか、強化し合うか、いずれかであることにによる。調和ある情動とは相互に強化し合う諸々の情動の複合体を意味するが、無関係の些事は、無関係であるゆえに、主要効果を減殺する情動を注いでしまう。何か副次的な細部から直接に生ずる情動が僅少であっても、それぞれは意識内の孤立した事実としての地位に甘んずることを拒み、主要効果と合体するよう象徴的な移行をあくまで求めるからである。

このようにシンボリズムとは、これを生ぜしめる symbolic transference をも含めて、経験の統一は多数の構成因子の合流から生ずるという事実の一例にすぎない。経験のこのような統一は複合的であり、それゆえ分析可能である。経験の構成因子は乱雑によせあつめられた無構造の集合ではない。構成因子は各自その本性上、ほかの構成因子に対して結ぶ一種の潜在的な構図 (scheme 第二章第一、六、七節参照) のなかに存立している。一箇の経験行為であるところの実際の具体的事実というものを構成するのは、まさしく、この潜在物を実在的統一へと移す変容作用である。しかしながら潜在的なものを実際の事実へと変容させるにあたって、情動的な所産や目的に関し、これらの抑制とか強化、これらへの注意方向の集中とか逸脱、あるいは経験のその他の要素が生ずるでもあらう。そのような要素もやはり経験行為の真の構成要素ではある。けれどもそれらは必ずしも経験の原始的局相 (primitive phases 第一章第五節参照) すなわち最終所産の源泉たる局相によっては決定されない。経験行為とは、複合的組成体が、一つの物であるという自己の性格を守りつつ、成つてゆくところのものである。また当の組成体のあれこれ諸々の部分、組成体

の分子や細胞などは、それらが存在の新たな機会へと移りゆくにつれて、新しい色合を帯びる。そのことを支えるのは、それらのものが、それぞれ直前の過去において、今を支配する経験の統一に寄与した要素であって、今度はこの統一がそれぞれに作用を返しているという事実である。

こうして人類は symbolic transference の精妙な体系によって、遠隔の環境あるいは定かならぬ未来に対して驚くべき感受性をみせることができる。だがその応報もうけている。symbolic transference はそれぞれ不適格の性格を気まぐれにもち込みかねないという危険な事実があるからである。個々の組成体にはたらく自然の作用そのものは、その組成体の生存や幸福、あるいはその組成体をかこむ社会の進歩など、すべての点について好都合なもの、とみるのは正しくない。このような警告も人々のみてきた憂鬱な経験を思えば陳腐であろう。精妙な組成体の精妙な共同体といえども、そのシンボリズムの体系が全体として成功しなければ、存在することができない。法典、行動規律、芸術の規範などは全体として、幸運な象徴的相互連関を助成する体系的行動を課してゆく試みである。共同体が変化するとともに、そのような規律や規範もすべて理性の光のもとで修正を必要とする。このばあい獲得すべき目的は二面をもつ。一つは、共同体を構成する諸個人に共同体を従属させることである。他の一つは、諸個人を共同体に従属させることである。自由な人々は自分たちがみずから樹てた規律に従う。一般にそのような規律は社会に人々が個々にとるべき行動を課しているとみられようが、その行動とは、社会が存在することの究極目的に関わるとみなされたシンボリズムに関連する類の行動である。

文明の主要な進歩こそ—子どもの手にある矢のごとく—その進歩の生ずる社会をほとんど難破させるばかりの過程である、と認めることが社会学的英知の第一歩である。自由社会を営む技術は、まず第一に、シンボルの規約(symbolic code)を維持することであり、第二に、英明な理性を満足させるような目的にそのような規約が役立つことを保

証してくれるよう、規約の修正を恐れないことにある。自分たちのシンボルに対する敬意と、それを修正する自由とを兼備することができないような社会は、結局のところ無秩序か、それとも他愛もない影に息をつめた無気力な生命萎縮か、そのいずれかによって衰滅しなければならない。

以上で本講演全三章の翻訳をすべて了えたことになる。

本「論叢」第38集の序に記したように、私はランガー女史やヘンの言及を通じてホワイトヘッドを知り、この原文八十八頁の小冊子に臨んだのであった。一読再読、その思想の要はほぼ理解することができたと確信したのち、当初は原文をはなれて私の理解のみを語ろうと用意した。けれども実際に筆を執りはじめてみると、それは容易でないことが判った。講演を文章化したものでありながら、思想はまことに独創的であり、そのことの証左ともなるが、用いられる基本概念が独自であって簡単な訳語でたやすく置きかえることは難しく、しかも叙述は簡潔にして含蓄に富み短文のうちに一切を語りつくす類のものであったからである。それゆえ私は原文に即して理解を一々確めてゆくという方法をえらび、あえて新たな翻訳を行い、必要と考えられるところでは煩瑣も厭わず注解を加えてきた。そしていま私はこの第三章の、したがってまた本講演全文の翻訳を完了したのち、あらためてふりかえり、われわれが行ってきた第一章および第二章の読解は十分に丹念な作業であり精確であったと信じている。今回も訳文のなかで若干の概念については参照すべき箇所を括弧内に記しておいたが、第三章の全体に關してはことさらに述べるまでもあるまい。まえがきに引用した前章末尾の一句に明かなように、本章全体はすでに詳解してきた原理の、具体例に即した例解であって、もはやわれわれには驚くべきものはないからである。

残された課題は、ここに全貌をあらわしたホワイトヘッドのシンボリズムという思想をどのように位置づけるか、である。記号や象徴は今世紀において新たな論議の集中した問題であり、この領野にはすでに数多い論著も重ねられているが、それらのなかにあつてホワイトヘッドの思想はなお独自性を誇ることのできるものであるのか。われわれは第一章第二章について果してきた努力を、第三章の補強をえて、ホワイトヘッドのシンボリズムの全面的理解へと高め、あらためてその意義について評価を行いたい。

〔未完〕